

バカンスよりパリ・シネマ。



『ミリキタニの猫』 9月8日公開

夏のパリはみんながバカンスに出掛けて閑古鳥が鳴く、と言われていたものだけど、最近はグローバリゼーションの影響が現れているのかさすがのフランス人も休暇が縮小している様子。少なくとも7月中はさまざまなサマー・フェスティバルが開催され、活気に満ちている。

今年5回目を迎えた映画祭パリ・シネマ(www.pariscinema.org)も、年々人気を増しているイベントだ。パリ市の主催により、市民のための開かれた映画祭を目指して作られただけに、ここでは業界人も一般人もみな平等。注目すべきはカンヌに出品された作品が含まれているのに加え、料金が格安なこと。チケット1枚4ユーロ(約660円。映画館だと通常約1600円)。すべての上映に有効な観放題バスが20ユーロ!(約3300円)。12日間にわたり250本以上の作品が上映されることを考えればこれは画期的にお得だ。今年のプログラムはコンペティション、新作のプレミア上映、クラシック映画のリバイバル、レバノン映画特集、河瀬直美やクリストファー・ドイルら何人かのシネアストにオマージュを捧げたレトロスペクティブが並んだ。

コンペ部門でみごと観客賞をさらった作品は『ミリキタニの猫』。ニューヨークの路上に暮らしながら猫ばかりを描く、

自称画家で85歳の日系人ミリキタニ氏を追ったドキュメンタリーである。ニューヨーク在住のリンダ・ハットエンドフ監督は、たまたま彼のことを聞きつけて会いに行き、その後徐々に言葉を交わすようになっていったさなか、なんと9.11のテロが起きて街中がパニックになってしまったために、見るに見かねてミリキタニ氏を自宅に居候させることになったという。映画はそんな偶然の出会いに始まり、ユーモラスでおしゃべりな彼のバックグラウンドに興味を引かれた監督がリサーチを進めるうちに、戦時中の日系人収容所の体験や生き別れになった妹の存在が発覚し、予想外のドラマが展開する。もちろん、そんな背景はまったく知らずに監督は映画を撮り始めたそうだが、偶然を必然に変えるのが優れた映画の持つ力だとすれば、これはまさにその典型だ。真実のドラマが放つ力と、それを的確に語る監督の手腕に引き込まれた。

もう1本、メトロ・バス賞を受賞したシェーン・メドウスの“This is England”も、ネオナチのティーンエイジャーの物語をきりきりとしたテンションのなかに描いた秀作。登場人物がすべて紋切り型とはかけ離れている点も素晴らしい。受賞作を見る限り、パリの観客はやはり目が肥えていると感じさせられた。◎